

王朝文芸の宗教的史観 (一)

源氏物語と平家物語の比較

— 王朝文化の残照 —

村 田 昇

第一論 須磨・明石の巻 (一)

源氏物語には人間の現在能力では動かせないと思つた過去世の宿業に翻弄される無力あはれな人間が、全巻に抒情されている。そのあわれは度重なる悲苦に遭う度に、仏教殊に天台淨土教の縁によつて徐々に深められ、やがて、宿業を解脱して、意志的主体的なわびさびに安住する中世の人間に命が運ばれてゆく。

それが最終巻の夢の浮橋の巻に象徴されている。その悲苦の劇的に最美なる舞台が、須磨の巻である。七百年十年前の「無名草子」には、「須磨あはれにいみじき巻なり。京を出で給ふ程のことども、旅の御すまひの程など、いとあはれにこそ待れ」と説破している。

平家物語は源氏物語の子である。

平家物語は別項にも論じておいた通り、源氏物語の花のあはれを模倣し、實のあはれを忘れた平氏、殊に一門の主魁清盛が、意志と理性の調御を失い、意馬心猿の狂うに任せ、忽ちに滅亡したあはれ

な吊鐘であった。それが灌頂巻に象徴されてある。その王朝美と悲別して、急傾斜を転々する玉の如く墮落する時の中で、最も広大な劇的場面は、福原遷都に繋る巻々である。

岡崎義恵先生は、「源氏物語の美について考へる時、私は屢々聖衆来迎図を思ひ浮かべる。」といはれた。この図は二十五菩薩が、紫雲に乗って往生人を来迎する。紫は感能的・熾烈・陽気。亢奮の赤色と、寒色といはれて沈静・安定・陰気な青色との調和である。感性と理性の調和である。須磨巻は青に黒の加つた世界である。明石巻は黒に代つて赤の萌え初めた巻である。光源氏の最も愛敬した女性は、紫の上と名づけられたが、この女性の美が最も輝くのは、光源氏が須磨から帰京して、彌々仏心を磨きものあはれを深めて往く濤標巻以後である。

光源氏は須磨明石に移つて足掛三年生活した。それ以前は一步も京都より外に旅していない。なぜ須磨に移つたかについては次の如き諸説がある。朧月夜事件によるとする説は、「花鳥余情、眞洵

「源氏物語新釈」・藤岡作太郎「国文学全史平安朝篇」・島津久基「源氏物語新考」・阿部秋生「源氏物語研究序説」等であり、これを否定する説は、藤村潔「源氏物語の構造」・多屋頼俊「源氏物語の思想」がある。その他宿世の縁で須磨明石に導かれたとする説は、多屋頼俊氏である。貴種流離譚とする説は、折口信夫「日本文学の発生序説」・「阿部秋生「源氏物語研究序説」・三谷栄一「物語史の研究である。政治上の原因とする説は、多屋頼俊「源氏物語の思想」・高橋和夫「源氏物語の主題と構想」・阿部秋生「源氏物語研究序説」がある。

光源氏須磨移住の底流に、褌みそぎの原始信仰があるとすることは高崎正秀氏である。「光源氏は「やよひのついでに」にできたる巳の日、けふなむ、かくおぼすことある人は褌みそぎしたまふべき、と、なまさかしき人の聞ゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ」(須磨)とある。褌は死霊を招待しまつり、不祥を払うのである。「河海抄」には、「世風記」の「招魂請魄、払除不祥」を引いている。かくて後文には海龍王と、桐壺院の死霊が招かれ夢となつて光源氏の運命を導く。記紀神話において諸神は黄泉國の死の穢を、櫛の小門の櫛原で褌し、その時に住吉の三神並に天照大神、月詠命、素神の三貴子を生んでいる。水は新生命を生む。新生命、新生活は古い穢れを褌・被して洗ひ捨てることで生れる。天照大神は、かくして生れた靈力を持つ「水の女」である。光源氏は須磨に行き褌し、更に明石に移り、精進齋齋幾十旬後、明石の上という「水の女」を得て、靈力を恢復し、その腹に明石中宮という貴子が宿る。そして帰洛後の後半生から偉大な人格を躍かす新生活が創る。明石

上は父入道が、住吉大神に祈願した「申し子」、「海龍王の齋き娘」、「玉鬘り姫」である。須磨の被から海龍王と故父桐壺院の夢の告、住吉の神の夢想・入道と光源氏との遭遇等、運命の転回は靈的・超現実・飛躍的で、写実的な他の巻々と異っている。褌は神の子の成長復活の爲にあつた。

それが仏教の前生譚・廻心懺悔・罪障消滅の影響を受けて、靈驗記・往生伝・遊行行脚・貴種流離譚と転進していった。

光源氏が自発的に須磨に流離した動力因は、遠つ神々よりの、罪穢ある者は水辺に出て褌するという民族伝習に自然に随順したことにある。だから彼は一個人としての罪惡観は起きなくても、自然法爾に罪穢が被除され淨福の運命が展開するのである。大生命の靈動に包まれているのである。彼を権力陰謀で殊更に追放せうとするから、光源氏はわれに罪無しと云つて対抗するのである。恰も記紀神話において、高天原から追放される素神が、己の清明心を論うと同じことである。又、源氏物語時代の道徳は、ものまぎれの如き愛情問題について寛大であつたこと、尊貴族の罪惡は表面から之を咎めないという礼儀から、光源氏の無罪を主張しているのである。以上の拙論を証するものは、

やよひのついでにできたる巳の日、けふなむ、かくおぼすことある人は褌したまふべき、と、なまさかしき人の聞ゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ、いとおろそかにせじやうばかりを引きめぐらして、この国にかよひける陰陽師召して、被へさせたまふ、舟にことごとくしき人形ひとがたのせて流すを見たまふ(須磨)

である上巳の被は漢に起り、我が国でもこれを模し、南園に幸して

被させたことが「類聚国史」延暦十一年に見え、「河海抄」は「世風記」の「招魂請魄、払除不祥」を引いている。須磨の上巳の禊は、後父桐壺院死霊出現の契機である。母と水は生命を生む。これを管る神が、水から生まれて水辺に祀られる住吉神である。法然は同じ播磨国の宮津で、土佐に流謫の途上、水の女である遊女を教化懺悔せしめ新生命の道を示した。

水は陰性即ち女性である。海も亦然りである。海は減少せず万物創生の廣大な母である。枯渴した生命はここで元気づき、穢れた心はここで新しく清まる。須磨は水で清たく身を淨め懺ぎ被つて澄み明らかめる須賀、澄みと語を同じくする。明石のアカは若の軀で、姿若の意。涌く、明しの意がある。須磨と共に水辺の禊の靈場に付した名である。光源氏はここに移つたことで、青春時代の妖艶な油脂の実存を洗いおとして、中世的仏教の実存に向上する。源氏物語創作の底に綱絳がある。阿闍世王は罪もない父頻婆娑羅王を殺し母韋駄希を牢獄に入れて苦しめ、悔の心に嘔まれ、熱病になり全身に瘡ができ、膿汁流れて臭く近づき難くなった。阿闍世は名医を探した。大医耆婆は大医仏釈迦の教を聞けと勧めた。その時空中に声あつて云う。大王よ、一つの逆罪を作ればそれに相当する罪を受ける。大王の今迄の罪は、到底地獄に墮ちることを免れぬ。されば一時も早く世尊の御許に赴け、釈尊を除いては、王を救う方はないと。阿闍世は、この空の声を聞いて大いに怖れ、戦き、空を仰いで「おん身はどなたであるか」という。声は姿を顕はさないで、「私は父頻婆娑羅である。耆婆の勧めに随つて早く釈尊の御許に行くがよい。」といった。これを聞くと、阿闍世は悶絶して倒れ身体中の

瘡が一時に増した。釈尊は逆にこの様を觀はしていった。私は阿闍世王の為に命を延べて滅度に入らない。私は証得の人々の為に生きるのではない。仏性を見ることの出来ぬ人人の爲である。かくて釈迦の為に、自愛三昧に入つて大光明を放ち給うと、その清涼な光明は、遙に阿闍世の身を照し、全身の瘡は一時に跡形なく癒えた。

釈尊は阿闍世に「大王よ。懺悔の心ある人に、罪はもはや罪ではない。汝は既に懺悔の人であるから、罪は淨められ、恐るることは少しもない」と教えた。そこで阿闍世は釈尊に、毒樹伊蘭の実から伊蘭の樹が生え、伊蘭の実から栴檀の樹は生えない。私が仏法僧の三宝を信じ事える功德を得たのは、伊蘭の実から栴檀の樹の生えた如くである。私はこの功德をもつて、未來衆生の煩惱を破りた。私がもし人々の悪心を破ることができたら、無間地獄に墮ち無量劫に受苦しても悔いない」といった。その時釈尊は阿闍世を讃めて、「もし一人でも菩提心を発するものあらば、その人は諸の仏の会座に集う大衆を飾るものである。大王よ。今より後、常にこの菩提心を失はぬやう努めねばならぬ。その故は、菩提心により無量劫の罪惡を滅し得る。この説法を聞いて、阿闍世王及び摩訶陀の民衆は、各々その座より立ち、三度釈尊を繞り、釈尊を恭礼して後この会座を辞した。という家庭の大悲劇である。源氏物語も家庭悲劇である。父を殺害したのではないが、父の後妻義母を犯し子を生ませたのは、類稀な大罪である。亡父桐壺帝はこれを咎めず、須磨に移つて佗が住居している光源氏の夢に示現して、「などかくあやしき所にはものするぞ、」とて御手を取り引き立て、「住吉の神の導きたまふまに、はや舟出してこの浦を去りね」と告げる。光源氏はい

と嬉しくて、「かしこき御影に別れたてまつりしこなた、さまぐ、悲しき事のみ多くはべれば、今はこの潜に身をや棄てはべりなまし、」と答へた。すると亡霊は「いとあるまじきこと、これはただいさかなるものの報いなり。われは位にありし時あやまつ事なかりしかど、自ら犯しありければ、その罪を終ふる程いとまなきて、この世を顧みざりつれど、いみじき憂へに沈むを見るに、堪え難くて、海に入り、渚にのぼり、いたく困じにたれど、かゝるついでに内裏に奏すべき事あるによりなむいそぎ上りぬる」といって、立ち去っている。こゝは殺された父頻婆娑羅王の亡霊が、阿闍世に「早く釈尊の御許に行き、教を受けよ」と告げ、又海龍王が夢に「など宮より召しあるには参りたまはぬ、とて、たどりありくと見るにおどろきて、さは海のなかの龍王の、いといたうものめでするものにて、見られたるなりけりとおぼすに、いとものむつかしう、この住まひたへがたくおぼしなりぬ」（須磨）とある。宮とあるのを源氏は竜宮と判断して、そこに迎えられるのは嫌だという気持が、①明石に移る動機が大きなものになったと、作者は作為していると解釈できる。

父亡霊の夢告を聞いて光源氏は、あかす、悲しくて、御供に参りなむと泣き入りたまひて、見上げたまへば、人もなく、月の顔のみきら／＼として、夢のこゝちもせず、御けはひとまれることちして、空の雲あはれにたなびけり、年ごろ夢のうちにも見たてまつらで恋しうおぼつかなき御様を、ほのかなれど、さだかに見たてまつりつるのみ面影におぼえたまひて、わががくかなしびをきわめ、命つきなむとしつるを、たすけに翔りたまへるとあはれ

に思すに、よくぞかゝるさわぎもありけると、名残たのもしう、嬉しうおぼえたまふこと限りなし、胸つとふたがりて、なか／＼なる御心惑ひに、うつゝの悲しきこともうち忘れ、夢にも御いらへを今すこし聞えずなりぬる事といふせきに、またや見えたまふと、ことさらに寝入りたまへど、さらに御目も合はで、暁方になりにけり。

夜が明けて明石入道が舟で迎えにき、明石に移つり、そこから幸運が開ける。桐壺帝の亡霊は、頻婆娑羅王と釈尊の働きをしている。明石入道の迎えの船は、弘誓の船である。来迎信仰に拠っている。釈尊が「懺悔の人は無罪である」と阿闍世を赦していることばを、光源氏自らに「罪なくして罪に当り」といはせている。光源氏が六十巻読み給ひて」（賢木巻）とある中の摩訶止観十巻の中に、瞋を翻じて忍を起すを名けて新と為す。「無明を破するを名けて新と為す」とある。「わがかく悲みを極め、命尽きなむとしつるを、助けに翔り給へると、あはれに思すに、よくぞかかる騒もありけると、名残頼もしう嬉しと覚え給ふこと限なし」（明石巻）とあるのは、阿闍世が亡父の夢告に、困って釈尊に会い懺悔発心した如く、暴風雨を父の恩と感謝し、政敵を怨まず世を譲らず、無明を破して新生しているのである。

吉沢義則氏は、臘月夜との関係は、ただ当時ありふれた墮落した「すき」行為であったというにすぎないのであって、尚侍としての資格に障りは無く、また源氏流謫の理由にもならない」という。

②陰悪な政治情勢さへなければ、何等問題になる事件ではなかつた。然し弘徽殿方とすれば、政治上光源氏排斥の一条件としたので

ある。光源氏が須磨へ退居の第一原因は、朧月夜事件ではなく、客觀的政治情勢即ち弘徽殿の太后等が、光源氏には皇位を左右せうとする野心があるという理由でまづ光源氏を流罪にし、次に春宮を廢しようとしたので、光源氏は先手を打って、流罪の事が決定しない先に引退したのである。弘徽殿方は謀反の罪を虚構した。そこで光源氏は無実の罪を主張する。読者は何とかして助ける道はないかと同情する。そこで作者は天下晴れて帰還させ、従来以上の権力を揮って朝廷に君臨させ、読者の正義感と同情を満足させる。その時作者の記憶中に罪無くして配流された人々が浮び、小説の構成に加はる。政治的謀畧で罪無くして流謫されたのは、有名な菅原道真である。作者が道真をモデルにしたことは、「恩賜の御衣はいまここにあり、と誦しつゝ入りたまひぬ、御ぞはまことに身はなたず、かたはらに置きたまへり」(須磨)(注・菅家後集・去年今夜侍「清涼」。秋思詩篇独断賜。恩賜御衣今在。此。捧持毎日拜「余香」。「うまやに句詩とらする人もありけるを」(同)(注・大鏡時平伝・播磨の国におはしましつきて、明石の駅といふ所に御やどりせしめたまひて、駅のをさのいみじう思へるけしき御覽じて作りたまへる詩)「たゞこれ西に行くなり」(同・菅家後集・莫発桂芳半具。円。三千世界一周天。天迥玄鑿雲將。齊。只是西行不左遷)でもわかる。大鏡によれば道真が大宰権帥に左遷させられた昌泰四年は、源氏物語制作の寛弘二年から約百年前である。道真を西海に追つた時平は、延喜九年三十九歳で早逝した。延喜十年には時平を助けて道真の左遷に尽力した参議藤原菅根も卒した。八年・九年・十年と疾疫・旱損

の年も続き、延喜二十三年には、皇太子保明親王が二十一歳で薨じたので、怨霊を恐れる当時の人々の心を代弁して「日本紀畧に」、「世をあげて云ふ。菅帥の靈魂宿念のなす所なり」とある。保明親王の薨後、直ちに皇太子に立てた慶頼王は、延長三年五歳で薨じ、延長八年の落雷には、大納言藤原清貫即死、右中弁平希世は顔を焼き、天皇も発病しやがて死んだ。村上天皇天徳四年九月廿三日の落雷には内裏焼亡。貞元五年十一月十七日の落雷にも内裏焼亡した。(帝王編年記)道真の怨霊に対する世の恐れは益々強まる。このあたりが「北野天神縁起」等怨霊文芸の起源である。⑧  
いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落かかりぬ。ほのほ燃えあがり廊は焼けぬ。(明石)  
雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜(同)  
この源氏の君、まことに犯しなきにて、かく沈むならば、必ずこの報いありなむ(同)  
は、道真の悲運を意識した筆である。天皇制権力の支配者は絶対神になれない。道真は政權の犠牲者怨霊である。反権力的である。故に神に祭られた。  
その他政治的謀畧で流罪にあつた人は、源高明があり、近くは清少納言の仕へた皇后定子の兄伊周があつた。式部は親しく伊周事件は見聞しており、当時これらの人に対して、宮廷の人々が大いに同情したことも考えられる。従つてかゝる史実を連想せしめる趣向を立て、謀畧による配流への圧迫として、源氏を悲しませ、又人々の同情の涙を誘はうとしたのが式部の趣向であり、それが成功して悲愁の氣にみちたものとなり得たのである。④

光源氏が「三月はつかあまりの程になむ、都はなれたまひける」とあるのは、「花鳥余情」「細流抄」は、「日本紀畧」・「扶桑畧記」・「帝王編年紀」・「公卿補任」に「左大臣源高明左遷、安和二年三月二十五日」とあるに準拠したものであるとしている。源高明は才学秀で父帝兄帝に寵愛され左大臣の昇進したが、例の如く藤原氏に妬れ無実の罪を着せられ、二年間大宰権帥に左遷されて帰された。彼は一の世源氏であり、母は更衣であった。これらが光源氏に共通している。彼が醍醐天皇の皇子である点が、桐壺の帝を醍醐天皇に擬する理由にもなっている。

補 紫式部の父為時は播磨権少掾に任ぜられている。「本朝麗藻」に「海濱神祠」(住吉祠)の詩があるのは、任地往來の際の吟である。為時は屈指の詩人で白詩に熟していた。源氏物語の作者は父の感化を受け、「須磨」「明石」の巻々の腹案には、播磨国で体験したこと、殊に高明が大宰権帥に左遷された途中を送迎したことがヒントになっていたかもしれぬ。(岡一男、源氏物語の基礎的研究四〇頁)

伊周と須磨の巻との関係は、「よに隠れて、大殿にわたりたまへり、網代車のうちやつれたるにて」とあるのは、「河海抄」には、伊周左遷の時の事と注して、「栄花物語」の「あやしのあじろぐるまにてとのにかへ給ひぬ」というを証文とする。又、「栄華物語」浦々の別れにも証拠がある。「大鏡」の道隆伝に、「内大臣伊周のおとぎに、百官並びに天下執行の宣旨給ふべきよし……」

又の年花山院の御事出でて、御官位とられて、只大宰の権帥になりて、長徳二年四月廿四日にこそは下り給ひしか」とある。花山

院の御事とは、「栄華物語」見はてぬ夢の巻に、

「寝殿の御方(為光)に、内大臣(伊周)通ひ給ひけるになむあいける。かゝるほどに、花山院、この四君(為光)の御許に御父など奉り給ひ、けしきだたせ給ひけれど、けしからぬ事とて聞きいれ給はざりければ、たび／＼御自らおはしつづ、今めかしうもてなさせ給ひける事を、内大臣殿は、よも四君にはあらじ、此の三君の御もとならむなど、推量りおほいて、わが御腹からの中納言に、この事こそ安からず覚ゆれ。いかゞすべきと、聞き給へば、いで只己にあづけ給へ。いと安き事とて、さるべき人二人具し給ひて、この院の、鷹司殿より、月いと明きに、御馬にて帰らせ給ひけるを、おどし聞えなむと思しおきてける物か。弓矢といふものにして、とかくし給ひければ、御その袖より、矢は通りけり云々」とあり、

とある。日本紀畧に、「長徳二年正月十六日丁巳、今夜花山法皇、密幸三故太政大臣恒徳公家(為光)之間、内大臣、竝中納言隆家従人等、奉射法皇御在所」とある。左遷の理由が女色と政争にあることも、光源氏と似ている。

光源氏が須磨落ちに際し、亡父桐壺院の陵に詣でた処、御山に参うでたまひて、おはしましし御ありさま、ただ日のまへのやうにおぼしいでらる、限りなきにても、世になくなりぬる人ぞ、言はむかたなく口をしきわざなりける、よろづの事を泣く／＼申したまひても、そのことわりをあらはにえうけたまはりたまはねば、さばかりおぼし宣たまはせしさま／＼の御遺言は、いづちか消えうせにけむと言ふかひなし、御墓は、道の草しげくな

りて、わけいらたまふ程いとど露げきに、月も雲隠れて、森の木立木ぶかく心すごし、帰りでむかたもなきこゝちして、をがみたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒き程なり、なきかげやいかが見ららむよそへつゝながむる月も雲がくねる。

は、「栄華物語」海々の別れに、伊周が流罪に際して、父道隆の墓に詣でた場面の次の文に似ている。

御をちの明順ばかりとともに、人三三人ばかりして盗まれ出でさせたまふ。御心の中に多くの大願を立てさせたまふしるしにや、事なく出でさせたまひぬ。それより木幡に参らせたまへるに、月あかけれど、この所はいみじう木暗ければ、(父道隆の墓)はその程ぞかしとおしはかりおはしまいで、かの山近くにては(車を)おりさせたまひて、くれぐれと分け入らせたまふに、木の間より漏り出でたる月をしるべにて、卒都婆や釘貫などいと多かる中に、これは去年のこの頃の中ぞかし。されば少し白く見ゆれど、その折から人々あまた物したまひしかば(当時多くの人が伝染病で死んだから)、(父のは)いづれにか」と、尋ね参らせたまへり。そこ(父の墓)にてはよろづを言ひ続け、ふしまろび泣かせたまふけはひに驚きて、山の中の鳥けだもの、声を合はせて鳴きのゝしる。ものあはれもなど、あはれに悲しくいみじきに、「おはしまし折、人よりけにめでたき有様をと、おぼしおきでさせたまひしかど、みづからの宿世果報のゆくはべりければ、今はかくて都離れて知らぬ世界にまかり流されて、又かやうになき御影にも御覽せらるゝやうもはべらじ。みづからおこた

ると思ひたまふる事はべらねど、さるべき身の罪にてかくあさましきめを見れば、いかで家路もまからで、こよひのうちに身を失ふわざをしてしがな。なき御影にて御おもてぶせと、後代の名を流しはべる、いと悲しき事なり……など、泣く／＼申させたまふままに、涙におぼれたまふ。聞く人さへなき所なれば、

明順、声か惜しまず泣きたり。

かくて伊周が光源氏のモデルであるといふ説も出た。然し栄華物語は、源氏物語より廿年後の作品であるから、栄華物語が源氏物語を模したかもしれぬ。伊周左遷は源氏物語創作以前である。当時の読者は須磨源氏を読みつつ伊周中件を想起したのであろう。

王朝文芸の恩人であり、源氏物語にも大影響を与えている中国詩人は白楽天である。道眞は最後迄白氏文集を座右に置いて愛読した。白楽天は、時の政治を鋭く批判した為に、江州に謫せられてより雄志挫け、十二史に「中青舎人王涯上言不宜治即貶江州司馬既失志能順適所遇」「託浮屠生死」「暮節惑浮屠尤甚」とある如く、忽ち仏教の信徒となった。江州に追貶されしは元和十二年、年正に四十四歳、楽天が人生行路における一頓挫である。儒教は順境に心を鼓舞するもの多く、仏教は逆境に情を慰藉するものが多い。今や逆境に処して亦其身をよくし、悠々天を楽しむし所以のものは、仏道に帰せしが為である。これは道眞の運命に似ている。道眞は謫地太宰府で「不出門」と題して

一從謫落在柴荆 萬死兢兢腸踏情 都府樓纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲 中懷好逐孤雲去 外物相逢滿月迎 此地雖身無檢擊 行為寸步不出門

と作っている。楽天にも不出門の詩があるが、道眞の不出門の詩の構想は、白詩の遺愛寺によく似ている。光源氏の須磨行も白氏文集から学んでいる処を抄出してみやう。「三千里のほかのこゝちするに」は、楽天が江州司馬に左遷される時の詩、「十一月中長至夜、三千里外遠行人 若為独宿楊梅館 冷枕单牀一病身」(文集十三・律詩、冬至宿楊梅館)に據る。「枕をそばだてて四方のあらしを聞く」は、「遺愛寺鐘欲枕聴、香炬峯雪撥簾看」(文集十六・香炬峯新下山居、草堂初成、偶題東壁二五首の第四首)に據る。「二千里外故人心、と誦したまへる」は、「銀台金闕夕沈々。独宿相思在翰林。三五夜中新月色。二千里外故人心。落宮来面煙沈冷。浴殿西頭鐘漏深。猶恐清光不三同見。江陵卑湿足三秋陰」(文集十四・律詩・八月十五日夜禁中獨直對月憶元九)に據る。幼時からの釈友宰相中将が、須磨に光源氏を慰問した友情は、楽天の親友元慎との久方振の交會に学んでいる。「御土器まるりて、酔ひのかなしび涙そゞぐ春の盃のうち」は、楽天が元慎に贈った詩中の句「醉悲灑淚春盃裏」に據る。

宰相中将が光源氏との訣別に際し、「たづかなき雲居にひとりねをぞなくつばさならべし友を恋ひつゝ」は、「長恨歌」の「在天願作比翼鳥在地願為連理枝」を引いている。

楽天は晩年に赴くに従い、愈々仏道に精進し慈悲深く広く大衆を愛している。これも光源氏が帰洛後の心豊かな生活内容に似ている。源氏物語須磨巻に、「おはすべき所は、行平中納言の、藻塩垂れつつわびける家居近きわたりなりけり」「須磨にはいとど心尽しの秋風に、海は少し遠けれど、行平中納言の、関吹き越ゆる、と言

ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」とある。(源平盛衰記卷三左右大臣事には、「須磨浦をぞ過給ふ。行平中納言の、旅人のたもとずゞしくなりぬらん関吹きこゆる須磨浦波」と詠じけん折しも被三思出けり。とある)行平は養学院を建てた土層貴族であった。それが須磨に流されたことは、古今集雜下に、

田村の御時(文徳)に、事にあたりて、津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける

わくらははにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつゝわぶと答へよ、在原行平朝臣

とあり、撰集抄第八「公任進位並行平遷流事」に、昔行平中納言といふ人いまそかりける。身にあやまつこと侍りて、須磨の浦に流されて、もしほたれつゝ浦伝ひしありき侍りけるに、たより給ひて、いづくにやすむ人にかと尋ね給ふに、この海士とりあへず、(白波のよする渚に世をすこす、あまの子なれば宿を定めず。とよみて紛れぬ。

とあり、源氏物語はこれによって光源氏須磨退去のことを構想し、更にこれらによって新構造したのが、世阿弥作謡曲「松風」である。この曲の海士松風・村松が遊女であることは、「和漢朗詠集卷下雑「遊女」の項に、「白波のよする云々」の歌をのせていることで明かである。摂津・播磨の水辺に遊女がいて、貴頭がこれに戯れたことは、「長秋記」「扶桑畧記」「古事誌」「遊女記」「宇治関白高野山御参詣記」に、道長・頼通の名がみられる。これらが、光源氏が水辺須磨浦で明石の上に會うという構成に転化されたのであ

る。「濡標」の巻にも、光源氏が、大阪の住吉神社に参詣の砌に、「あそびどものつどひまゐれるも、上達部と聞ゆれど、若やかに、好まじげなるは、みな目とゞめたまふ」とある。川魚が産卵の為に海辺に下るやうに、新しい生命を産む為に、女が水辺に集る。これが水の女である。明石の上も亦この女の生體を構想している。住吉明神は水辺によって生命を生産した神として水辺を主宰したから、光源氏と明石の上との艶福を結んだのである。須磨出發離京の日を三月下旬としたのは、高明左遷の日と符合させる以外、南海の水温み万物生々の青陽の春に、光源氏の将来の運命の進化を余情象徴している。蓋し作者も意識しなかつた幽玄である。神戸市には、須磨関や行平論居と松風・村雨の二女に因む町名、道眞に因む天神町がある。平家物語の摂津播磨に關しての遊女は、「高倉院 敵島御幸記」をみると、敵島御幸の高倉院一行が、遊女の浦として有名な播磨の室津に着くと、遊女が多く御所近く押しよせたのである。

尚清盛が崇敬した安芸の敵島神社の祭神は、源氏物語若紫巻に、「龍王の后になるべきいづき女」と書かれた。

光源氏は初めて大旅行し、そこに大海を見た。山に生れ山に住むものが、一大海を見た驚喜によつて精神的生命が新生する。生命の革新である。山と水・陰と陽の調和した美を発見した。崇峻・森敵な比叡山を仰いだ眼で、清明で開放された大海を見たのである。

遙に霞み渡りて、四方の梢そこはかとなう煙り渡れる程、「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残す事はあらじかし」と宣へば、「これはいと浅く侍り。ひとの国などに侍る海山の有様などを御覽せさせて侍らば、いかに御絵いみじうま

さらせ給はむ。富士の山、なにがしの嶽」など語り聞ゆるもあり。又西の国のおもしろき浦浦、磯のうへをいひ続くるもありて、よろづに紛はし聞ゆ。「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほ奥に侍れ。何のいたり深き限はなけれど、ただ海の面を見渡したる程なむ、怪しく異所に似ず、ゆほびかなる所に侍る。かの国の前の守所発意の、女かしづき据えたる家、いといたしかし。

(若紫)

と書いてあるのは、比叡連峯の北山に立つて、波漫々たる海の美に誘ひつゝ、海龍王の敵き女とも思はれる水の女との結婚を予想させているのである。作者は山の幸海の幸神話を念頭において、山との海との女を結婚させ、山嶽性と海洋性を和合せ、新しい人間を誕生させようとしている。

須磨巻には、「おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩たれつゝ、わびける家居ちかきわたりなりけり」とある。

頭基については、徒然草第五段に、

不幸に愁へにしづめる人の、かしらおろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに問さしこめて、まつこともなく明し暮したる、さるかたにあらまはし、頭基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さも覚えぬべし。

とある。古事談第一には、

頭基中納言ハ後一条院ノ寵臣也。天皇崩御之後、登天台山楞嚴院。落飜入道云々。発心之根源天皇晏駕之期梓官不供灯。問其由。所司皆依勸。新王更云々。聞此更。忽発心。尋常之時常詠白樂天詩古墓何世人不知。姓与名。化路傍土。年々

春草生。又云、アハレ無罪ニ配所ノ月ヲ見バヤト云々

清輔草子云、入道中納言顯基、後一条院ノ近習ノ臣也。長元九年四月十七日ニ院崩ス。同廿二日奉遷上東門一此ノ日於大原ニ出家ス。生年卅七、時人流涙

とある。「罪なくして配所の月を見る」とは、名利を超え不運を嘲たず、貧窮と孤独を樂み、自受用三昧、高僧の如きわびさびの天地である。ここで留意すべきは、顯基が、道眞、紫式部や慶滋保胤等と同じく樂天詩の愛読者であったこと、源氏物語や平家物語に結縁の地洛北大原に隠棲したことである。「十訓抄」には上醍醐に世を遁れていた頃、醍醐の大僧正仁海の求めに応じ琵琶の三曲を弾じたと誌してある。但し紫式部以後の人物であるから、源氏物語須磨に於ける光源氏等の影響を受けた人物と考えられる。

平家物語卷三大臣流罪は、清盛が太政大臣藤原師長を尾張に、摂政関白藤原基房を太宰の師に遠流した叙事で、源氏物語須磨の巻と密接な関係がある。

大臣流罪の例は、……右大臣菅原、かけまくも忝く今の北野の天神の御事なり。左大臣高明公、内大臣藤原の伊周公に至るまで、その例既に六人、されども摂政関白流罪の例はこれ始とぞ承る。

……太政大臣師長は官を止めて、東の方へ流され給ふ。管絃の道に達し、才芸すぐれておはしければ、……保元の昔は南海土佐へ移され、治承の今は卅た、東関尾張の国とかや。もとより罪なくして配所の月を見むといふ事をは、心あるきは人の願ふことなれば、大臣敢て事ともし給はず、かの唐の太子の賓客白樂天、潯陽の江の辺のやすらひけむ、その古を思ひやり、嗚海瀉沙路はる

かに遠見して、常に朗月を望み、浦風に嘯き、琵琶を弾じ、和歌を詠じて、なほざりかてらに月日を送り給ひけり。

ある時当国第三の宮熱田明神に参詣あつて、その夜神明法樂の為に琵琶を弾き、朗詠し給ふに、所もとより無智の境なれば、情を知られる者もなし。邑老、村女、野叟、頭をうなだれ、耳を敬つといふとも、更に清濁をわけて、呂律を知ることなし。されども胡巴琴を弾ぜしかば、魚鱗躍り逆り、虞公歌を発せしかば、梁塵動き揺ぐ。ものの妙を極むる時は、自然に感を催す道理なれば、諸人身の毛よだつて、満座奇異の思をなす。やうやう深更に及んで、譜香調の内には、花芬霞の気を含み、流泉の曲の間には、月清明の光を争ふ。「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤を以て」といふ朗詠をして、秘曲を弾き給ひしかば、神明感応に堪へずして、宝殿大きに震動す。「平家の悪業なかりせば、今この瑞相をばいかゞか拜むべき」とて、大臣感涙をぞ流されける。

藤氏が伝えた王朝文化が、清盛が代表する権勢武伐に破壊される相が語られてある。菅公始め白樂天をも加えて、時の権力の為に遠流され、光源氏須磨寓居のモデルとされた人々が列挙されてある。罪なくして配所の月を見ることは、心ある際の願とあるのは、「古事談」の顯基の故事に據つてゐる。権勢の虚位の座を捨てさせられ、名利の巻を追はれて、辺土においてかなしみを翫味することは、聖・浄の世界であつて、理想的生き甲斐ある遁世人の様式であると語つてゐる。悲劇は人生肯定の最高形式で不幸災厄は勿論死をも肯定する。怵びさびは悲劇的精神である。「罪なくして配所の月を見ることは、心ある際の願」といふ心は悲劇的精神である。運命愛であ

る。忠度始め平家の死者が、後生極楽往生の種因を播く道場として絶対積極的に人間を生き貫き、南無阿弥陀仏と念仏して臨終していることは、悲劇である。

而してこの章の本意は、琵琶を最大宝器と信仰する言僧が琵琶の徳を語る処にある。薄命で辺土に漂泊する言僧が、京から追放され同じ悲運に遭って屈せず、これを恩寵と歓喜する師長を、琵琶の靈徳で慰霊する章である。

樂天の綺語観に據って、芸能の宗教価値を語り、自己の道の信仰を深めている処も、重視せねばならぬ。

平家物語で源氏物語の須磨の巻に匹敵する巻は、巻七後半の都落

・維盛の都落・聖主臨幸・忠度の都落・経正の都落・青山の沙汰・一門の都落・福原落・巻九盛俊最後・忠度最後・教盛最後・濱職・落足・小宰相である。「源平盛衰記」では、第三巻左右大將事である。この巻と「平家物語」の都うつり・新都・月見・もつけの抒情が、須磨巻を引用模倣している。平家一門を高雅にしているのは、「ものあはれ」をしる情韻である。それは源氏物語のものはあれが、戦死という極限状況を縁として、浄土教と結ばれて深められた美である。それが、これらの巻々に多く集められている。巻五の都うつりの動機は、治承四年二月当時三歳の安徳天皇に讓位した高倉上皇は、上皇最初の社参は、賀茂が石清水である先例を破って、嚴島に遙々行くことを発表したので、園城寺大衆これに反対して蜂起し、延暦寺興福寺衆徒と謀議して、法皇及び上皇を盗み出さうと決議した。上皇は平氏警備の中に、密に嚴島に出發した。平氏が諸大寺の反対を押し切ったの強行は、これまで互に攻伐を事としていた

延暦寺・園城寺・興福寺等諸寺院に連合の契機を与え、これを平氏の敵対者とするに至った。清盛が以仁王の乱に勝ったにもかかわらず、法皇・上皇・天皇を奉じて、突如福原遷都を決定したのは、寺院勢力の圧力に不安を感じたからである。そこで源氏物語須磨巻と、平家物語巻五都うつりから巻七の福原落までとの文芸美を比較してみよう。

三者とも深刻な哀別離苦を抒情しているが、平家物語の巻五と巻七は区別して考えねばならぬ。巻五の場合は清盛の例の我儘行為であって、「月見」が語るやうな源氏物語的閑雅な悲哀が滾うている。即ち

福原の新都にましましける人々、名所の月を見むとて、①或は源氏の大將の昔の跡をしるびつゝ、須磨より明石の浦づたひ、淡路の迫門をおし渡り、絵島が磯の月を見る。或は白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて帰る人もあり。

②誰そや蓬生の露、うち払ふ人もなき所に」と咎むれば、「これは福原より大將殿の御上り候」と申す。……大宮は……南面の御格子あけさせ、御琵琶あそばさせける所へ、大將つと參られたれば、しばらく御琵琶をさし置かせ給ひて、「夢かやうつゝか、これへこれへ」とぞ仰せける。③源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御女、秋の名残を惜みつゝ、琵琶を調べて夜もすがら、心をすまし給ひしに、有明の月の出でけるを、なほ堪へずやおぼしけむ、撥にて招き給ひけむも、今こそおぼししられけれ。

と明に須磨④、蓬生⑤、橋姫⑥の巻に據って離京の不安を源氏物語の風雅で楽しんでゐる。月輪觀、月愛三昧の語で、天台実相が説かれて

いるが、それがここに文芸的形象をとつたと考えられる。人界の小ささ、差別へ愛着する愚かさ。無常のはかなさが、月光に普遍平等の如來の大悲を直観することによって、あはれと悲観されるとともに、帰命大安慰できるのである。

須磨の巻には、

月のいとはなやかにさしいでたるに、こよひは十五夜なりけり、とおぼしいでて、殿上の御遊び恋しく、所々ながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ、○二千里外故人心、と誦したまへる、例の涙もとゞめられず、とある。平家物語の月見も、八月十五日の中秋名月であった。○は白氏文集、卷十四、律詩、

八月十五日夜禁中独直对月憶三元九「銀台金闕夕沈々。独宿相思在翰林。三五夜中新月色。

二千里外故人心云々」に據っている。この詩は平家物語卷七青山之沙汰に、

A 村上の聖代応和のころほひ、三五夜中の新月の色、白くさえ、涼風颯々たりし夜半に、帝清涼殿にして玄象をぞあそばされける。

と引かれている。尚「琵琶も青山之沙汰」に、A句を挿んで、かの青山と申す御琵琶は、昔仁明天皇の御宇嘉祥三年三月に、掃部の頭貞敏渡唐の時、大唐の琵琶の博士廉承武にあひ、三曲を伝へて帰朝せしに、その時玄象、獅子丸、青山、三面の琵琶を相伝して渡りけるが、龍神や惜み給ひけむ、波風荒く立ちければ、獅子丸をば海底に沈めぬ。今二面の琵琶を渡いて、わが朝の帝の御

宝とす。……時に影の如くなる者御前に参じて、優にけだかき声を以て、唱歌をぞめでたう仕る。帝しばらく御琵琶をさしおかせ給ひて、そもそも汝はいかなるもので、いづくより来れるぞ」と仰せければ、……大唐の琵琶の博士廉承武と申すものにて候ふが、三曲の中に秘曲を一曲残せる罪によって、魔道に沈淪仕る。今君の御撥音妙に聞え侍る間、参入仕る所なり。願くばこの曲を君に授け参らせて、仏果菩提を生ずべき」云々

とある。これは音楽説話中の琵琶説話、仏教の声慶得道説話である。この様に源語・平曲共に琵琶の記述が多いのは、琵琶がものあはれな悲曲であること、⑤白氏文集が盛行し採用されている琵琶行の如きも悲運の詩人であるからである。

平曲に琵琶に関する記述の多いのは、何よりも平曲語りの盲僧の楽器が琵琶であったからである。樂天に琵琶行の詩のあることも、盲僧の芸能的自信と情熱を強め掻きたてたであろう。琵琶法師はその撥先で、諸行無常・会者常離・哀離難苦の哀音を、十方世界に響流させることに淪落不遇の盲人としての生き甲斐を自覚したのである。それは源氏物語のものあはれの中世的再現であった。

尚須磨巻には、光源氏の親友頭中将が、須磨の光氏を恋慕して、処罪を覚悟して訪問した処、

月頃の御物語、なきみ笑ひみ、わかぎみの何とも世をおぼさでものし給ふかなしさを、おとどのあけくれにつけておぼしなげくなどかたり給ふに、たへがたくおぼしたり、つきすべくもあらねばなかくかたはしも見まねばず、よもすがらまどろまずふみつくりあかし給ふ。さ云ひながらも物の聞えつゝみて急ぎかへり給

ふ。いとなくくなり。御かはらけまゐりて〇ゑひの悲の涙そゝぐ春のさかづきのうちともろ声にずんじ給ふ。御ともの人々どもみな涙をながす。おのがじくはつかなる別ををしむべかめり。

とある。〇は白氏文集・律詩・別<sub>二</sub>徹之於濃上<sub>一</sub>の詩、「往事渺茫都似<sub>レ</sub>夢。旧遊秀落半<sub>レ</sub>帰<sub>レ</sub>泉。醉麗<sub>レ</sub>浚春杯裏、吟苦支<sub>レ</sub>頤暁燭前。云云」によつてゐる。

平家物語卷五新都に、

唐の太宗の驪山宮を造つて民の費をや憚らせ給ひけむ遂に臨幸なくして瓦に松生ひ墻に葛しげつてやみにけるには相違かなとぞ云々

とあるのは、白氏文集・諷諭四・新樂府下、驪宮高。高高驪山上有<sub>レ</sub>宮。朱樓紫殿、三四重。遲遲今春日。……牆有<sub>レ</sub>衣今瓦有<sub>レ</sub>松。吾君在<sub>レ</sub>位已<sub>レ</sub>五載。何<sub>一</sub>幸<sub>二</sub>於其中<sub>一</sub>云々。に據つてゐる。

要之源氏物語では、無名草子が「須磨あはしにいみじき巻なり」と評した須磨の巻さへも、そのあはれは京洛的の閑雅である。その模倣が平家物語卷五の福原遷都の物語である。但し巻七の下半はさうではない。源氏物語の如く昼の上での苦悶ではない。刀刃の下に戦死し屍を山野に曝す悲惨である。死に迫られ死と共に生きる文芸である。一步一日が死である。死が必然であり生が偶然である。一刹那後の死魔の手からのがれたら、明日が死である。光源氏の運命の不安は、いつ都に還れるのか、死ぬまで須磨に住まねばならぬかにある。最も悲しく恐ろしい死は急速に迫つてはいない。光源氏のモデルは業平・楽天である。唯美主義時代に在つて、源信の来迎信仰の示すが如く死を曠美している。巻七の平家の人々の都落ちは、死

出の三途の旅、屠所の羊である。生還して都を見る希望はない。この死を真実に美化したのが法然の浄土往生教であった。ゲーテがいつた死して成る道、死ぬことによつて生きる道、悪人となり聖人となりきること、往生可能の道。それが法然浄土教であった。平家物語は法然浄土教を因縁として真実の生死の美を顕現している。それはかなしみに涅槃した美である。それを「寂」という。俊成に自覚されて芭蕉に伝えられた悲劇的精神である。

尚須磨巻には、光源氏が須磨に貶謫せられ初めて到着のかなしみを、

なきさによる浪のかつかへるを見給ひて、うらやましくもうちずんじ給へるさま、さる世のふることなれども、めづらしききなされ、かなしとのみ御ともの人々思へり。うちかへりみ給へるに、こし方の山は霞はるかに、まことに三千里の外に心ちするにかひのしづくもたへがたし

とあるのは、白氏文集・律詩・冬至宿<sub>二</sub>楊梅館<sub>一</sub>、十一月中長至夜。三千里外遠行人。若為<sub>二</sub>独宿<sub>一</sub>楊梅館。冷枕单床一病身。に據つてゐる。

義仲の軍勢を惧れて狼狽し、一門揃つて旧都を捨てて福原に逃走するあはれは、源氏物語の如く、只一貴族の身上ではなく、平家一族、更に誇張していへば、天地も顛倒するかと思はれる挙国の大悲劇である。巻七の「主上都落」には、

①帝都名利の地、鷄鳴いて安き事なし。治れる世だにも此くの如し。況や乱れたる世においてをや。②吉野山の奥の奥へも入りな

ばやとは思し召されけれども、諸国七道悉く背きぬ。何くの浦か  
穩しかるべき。③「三界無安猶如火宅」とて、如来の金言、一乘  
の妙文なれば、何かは少しも違ふべき。

とある。①は白氏文集、帝都名利場、鷄鳴無<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>居」により、②は  
古今集卷雜歌下の「み吉野の山のおなたに宿もがな世のうき時のか  
くれがにせむ」を引き、③は法華経の譬喩品の火宅喩と称せられた  
「三界無安猶如火宅」に據っている。

註 ① 湖月抄、此夢に宮より召あるといふは、都に帰り玉ふ  
べき諸相なるを、源の心には龍宮と思ひておそれ玉ふ  
也。

② 源氏物語今鏡二六二―三頁

③ 詳しくは、藤沢衛彦・日本伝説研究第四卷・菅公怨雷考  
にあり。

④ 愛媛大学起要 人文科学 第二卷第一号 重松信弘・須  
磨卷の文芸的特質

⑤ 歌花連署事書、哀傷の所はめくら法師がかたる平家物語  
にぞある。

この論文の要旨は、関西大学院における昭和四十六年度日本文芸  
学会で公開講演した。この論文には紙数に制せられ明石入道につ  
いての論稿を省略した。

私は従来下関文化大学で源氏物語を講義してきたが、明年一月か  
ら平家物語の講義を開始することになって、自ら此の二大古典の比  
較研究をする必要が生じた。

平家物語は源氏物語の子であるから、複雑甚深の関係が多い。こ  
れを明年は一冊にして公表したいと考えている。